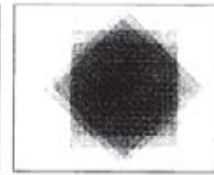


# モノグラフ・高校生'97

vol.48 高校生白書



監修・静岡大学教授 深谷昌志

桜美林高等学校教諭 尾澤弘恒  
東芝海外子女教育相談室 仁平正男  
東京都立上野高等学校教諭 木下勉  
東京都立上野高等学校教諭 蒲生眞紗雄  
埼玉県立松山高等学校教諭 三枝恵子

## ●目次

序章	高校生の生活をとらえる	2
要約		4
第1章	高校生の日常生活	8
	1. 生徒たちのプロフィール	8
	2. 日常生活	13
	3. 平日の行動	19
第2章	学校生活・授業	26
	1. 遅刻・忘れ物	26
	2. 塾・予備校通い	29
	3. 初めから入学したかった高校か	30
	4. 授業の理解度	32
	5. 登校時の気分	33
	6. 学校生活の充実感	34
第3章	アルバイト・金銭感覚・おしゃれ	36
	1. アルバイト	36
	2. 金銭感覚	39
	3. 持ち物とおしゃれ	45
第4章	高校生の規範意識の変化と社会とのかかわり	53
	1. 盗難と飲酒・喫煙	53
	2. 逸脱経験と規範意識	58
	3. 飲酒・喫煙経験者の意識と行動	63
	4. 社会とのかかわり	65
第5章	人間関係と自己像	68
	1. 友人関係	68
	2. 異性関係	69
	3. 性情報との接触	74
	4. 親子関係	76
	5. ストレスと自己像	83
	まとめに代えて	87
資料1	調査票見本	88
資料2	学年・性別集計表	102

序  
章

# 高校生の 生活をとらえる

静岡大学教授 深谷昌志

## 高校生調査のむずかしさ——●

高校生が変わったといわれる。テレビなどでブルセラやテレクラに群がる女子高校生を映し出しているのを見ると、高校生の性感覚の乱れがどこまで進んでいるのかが気かりになる。そこまでいわなくとも、駅の片隅で制服のままタバコを吸っている、あるいは、プラットフォームでキスをしている高校生を見

かけることが多い。

もっとも、どの時代でも、若者の中に量的に多いとはいえないにしても、様々な形で先端をいく者が一定の割合で存在するのは確かであろう。テレクラを例にするなら、テレクラという形は現代固有のものにしても、問題となるのはテレクラに電話をかけたのが全体の中でどの程度の割合を占めるかであろう。

そうした意味では、高校生の姿を全体の中に位置づけて考える必要を感じる。しかし、

高校生の場合、全体をとらえるのはそれほど簡単でない。

高校は偏差値によって進学先が決まるので、高校のレベルによって生徒たちの持つ文化が異なってくる。アルバイトひとつをとっても、多くの生徒が難関大学への進学を目指す高校なら、予備校通いを含めて生徒たちは勉学に明け暮れ、アルバイトをしている生徒は皆無に近い。しかし非進学校なら、放課後、アルバイトに精を出す生徒がかなりの割合になる。当然、後者は自分で稼いだお金を手にする割合が高いが、前者は親から小遣いをもらう生活であろう。

したがって、高校生のデータを読むときには、どういう高校で調査を行ったのかを確かめる必要がある。ここで、『モノグラフ』の裏話をする感じになるが、本モノグラフは大学進学率の高い高校をサンプルにしている場合が多いので、どうしても勉学派の高校生の結果になりやすい。そうしたことを配慮して、「定時制高校生の生活と意識」(vol. 45)や「大学へ進学しない生徒たち」(vol. 20)などのレポートをまとめてきた。本レポートでも、調査対象学校が地方の進学校に片寄っていた。高校生の実態というにしては、大学進学層の占めるウエイトの高い点を留意してほしい。

## 両面を持つ高校生

くわしい結果は本論を参照してほしいが、データの中に、①「アルバイトをしている」

が3.4%、②「1度も遅刻したことはない」が54.7%、③「友だちが5人以上いる」が78.3%、④喫煙経験者は「たまに」を含めても8.8%、⑤「バイクに乗ったことはない」が87.8%など、高校生の健全さを物語るものが多い。

そうした反面、同じ高校生が、①「つきあっている異性がいる」が16.7%で、「過去つきあった」を含めると49.2%、②「テレクラに電話をしたこと」のある生徒は「1、2回」を含めて20.4%、③「なんとなくイライラする」生徒は「わりと」の30.7%を含めて、56.8%に達する、④「たまに」を含めると、飲酒経験者は48.7%と半数に迫る、⑤「ナンパされた」経験のある生徒は22.5%（女子は35.2%）と4分の1に近いなどの数値が得られている。

したがって、進学志向の強い高校生でも、過去の高校生と比べれば、それなりの変容をしているのがわかる。現代社会に生きている以上、その影響を受けざるを得ない。しかしそうした変容は予想されるほどではなかったように思える。

諸外国の高校を訪ねると、日本よりおとなびた高校生に出会う。特にアメリカの高校生には20代を超えたおとなのムードを感じる。それに対し、日本の高校生の印象は幼いにつきる。素直で気立てもよいが、自分でものを考えていない。きちんとした自己が形成されていないのが、現代の高校生であろう。そうした意味では、これまでの高校生と比べ、変容の少なさを喜んでよいのかわからないというのが調査を終えた後での印象である。



## 高校生白書

### 要約

#### 1. 日常生活

① 起床時間は「6時前」に起きる者が18.6%、「6時～7時」に起きる者が53.2%と5割を超える。就寝時間は「午後11時～12時」37.4%、「午前0時～1時」34.9%と、午後11時から1時の間に就寝する者がほぼ7割を占めている。1時以降の者も16.2%いる。

(p.13 表1-9、p.14 表1-10)

② 起床時の空腹感は、「とても・わりとすいている」27.3%、「ぜんぜんすいていない」8.6%。朝食は「毎日食べる」8割、逆に、「ほとんど食べない」生徒も7.1%いる。男子に比べ女子の方が「毎日食べる」割合が高い。

(p.15 表1-11、p.16 表1-12)

③ 学校にお弁当を「毎日持っていく」生徒は59.5%、「ほとんど持っていかない」「持っていったことがない」生徒も14.9%いる。持っていかない生徒は「学校の食堂で食べる」40.5%、「学校でパンや牛乳を購入」43.1%と、8割を超える生徒が校内の食堂や購買を利用している。また、「朝、コンビニでパンやお弁当を買ってくる」生徒も13.7%いる。

(p.17 表1-14、p.18 図1-2)

④ 夕食を「1人で食べることが多い」者は23.0%で、運動部で熱心に活動している者に多い。「家族全員で食べる」38.3%、また、「父親以外の家族と食べることが多い」27.0%と、父親不在の夕食をしている者も3割いる。

(p.18 表1-15)

⑤ 日常生活の中で「毎日している」をみると、「テレビやビデオを見る」が80.3%と圧倒的である。「家での勉強」では「毎日している」34.5%、「1日おきくらい」を合わせると6割。その他「5日に1回以上している」では「友だちに電話」5割、「塾や予備校」2割、「異性とデート」1割弱である。自由時間がテレビやビデオに占められているのは高校生として少し寂しい。(p.19 表1-16)

#### 2. 学校生活

① 遅刻を「1度もしない」54.7%、「年に数回ある」を合わせ88.8%、逆に「週に2、3回・ほぼ毎日する」者は2.8%である。性別では、女子の方が遅刻をしない割合が高い。(p.27 表2-1)

② 塾や予備校へ行っている生徒は、全体の5分の1で、「週1～3回」が大多数を占める。学年別では、3年生が少ない。(p.29 図2-2)

③ 「入学したかった高校」かどうか尋ねた結果では、「初めからぜひ入学したかった」29.6%、「やや入学したかった」24.6%と、「希望校」であった者は5割を超える。しかし、「まったく・あまり入学したくなかった」と答えた者も24.5%おり、成績の下位者に多

い。(p.31 図2-3)

④ 授業の理解度をみると、「ほとんど・3分の2くらいわかる」と答えた割合では、国語39.8%、数学30.4%、英語が35.3%。性別では女子が国語・英語、男子は数学の数値が高い(p.32 図2-4)

### 3. 学校生活の充実度

① 「学校生活の充実感」をみると、「とても・かなり充実している」26.8%、逆に「あまり・ぜんぜん充実していない」者も32.9%いる。性別では女子が、部活動の参加別では熱心に活動している者が充実度が高い。(p.35 表2-2)

### 4. アルバイト

① 現在アルバイトをしているのは、全体で3.4%、成績上位者・下位者が多い。進路別では就職希望者が10.0%である。(p.37 表3-1・3)

### 5. 金銭感覚

① 高校生の小遣いの額は、「5千円から1万円」が男子51.0%、女子46.2%。学年進行に応じて、もらう金額も増える。アルバイトをしている生徒は、「もらっていない」が31.2%である。(p.39 表3-5、p.40 図3-2、p.41 図3-3)

② 趣味的なことに「自分のお金を使う」が8割前後、友人との飲食などは7割、洋服などのおしゃれは4割である。(p.42 図3-4)

### 6. 持ち物とおしゃれ

① 個人所有のものでは、学年進行で所有率が増加するのは個室・ウォークマン・専用電話など。アルバイトしている生徒は趣味的な要素の強いものをより多く所有する。(p.46 表3-8、p.47 表3-9)

② 毎日学校に持っていくものでは、女子はリップクリーム・ヘアブラシ・鏡。お弁当は1年生で80.8%、3年生では69.1%、ただし成績上位者は81.1%が特参する。(p.48 表3-10、p.49 表3-11、p.50 表3-12)

③ 「おしゃれ」と自己評価しているのは7.0%、「朝シャン」を毎日しているのは全体で8.8%。女子6.1%に対して、男子11.5%。してみたいおしゃれは1年生「茶髪」52.7%、2年生「ブランドファッション」44.8%、3年生「パーマ」31.7%である。(p.51 表3-13・14・15)

### 7. 逸脱行為と規範意識

① 盗難経験者は27.7%いる。学年進行で増加し、3年生では36.7%に達する。(p.54 図4-1)

② 酒を「まったく飲まない」生徒は51.3%。飲まない生徒は女子に多い。飲酒経験者は2年生で急増する。一方、タバコを「まったくすわない」生徒は91.2%、特に、女子の非喫煙率は98.2%に達する。喫煙経験者の中ではよくすう生徒の割合が高い。(p.55 表4-1、p.57 表4-2)

③ 「学校が禁止している服装やヘアスタイルで登校する」ことが「何度も・ときどきある」生徒が22.8%いるが、逸脱行為は予想以上に少ない。成績別では上位者と下位者に逸脱行為が多くみられる。(p.58 図4-2、p.59 表4-3)

④ 規範意識の形成では、パチンコや友人同士での飲酒を肯定する者が多いが、窃盗や万引きなどの犯罪行為は明確に否定している。ただし、成績下位者と上位者の規範意識の低さが気になる。(p. 60 図4-3、p. 61 表4-4)

⑤ 飲酒・喫煙経験の度合いが高くなるにしたがって逸脱行為の経験も急増し、規範意識も急激に低下する。特に飲酒・喫煙をよくする生徒の逸脱行為の経験率が高く、規範意識も低い。(p. 64 表4-7)

## 8. ボランティア活動と外国体験

① ボランティア活動の体験は29.4%にすぎない。ただし、3年生は47.0%が体験している。全体として、活動への関心度はあまり高くない。(p. 66 図4-4・5)

② 外国旅行の経験者は23.8%もいるが、回数は1回が圧倒的に多い。(p. 67 図4-7・8)

## 9. 友だち関係

① 仲のよい友だちが「5人以上いる」割合は78.3%、「2～3人」を合わせると96.4%である。(p. 68 図5-1)

## 10. 異性関係

① 異性関係では、「現在つきあっている異性がいる」16.7%、「以前いたが、今はいない」を合わせると、男女ともほぼ5割が「つきあい体験」を持っている。学年が上がるにつれ「つきあい体験率」も増加する。成績別では成績の上位者・下位者が5割を超える「つきあい体験」を持っている。(p. 69 図5-2、p. 70

## 表5-2)

② つきあい方のスタイルをみると、「いつも・わりとよくしている」ことは、「クリスマスや誕生日にプレゼントをあげる」6割、「登下校を一緒にする」「毎晩のように長い電話をする」「彼女(彼)の部屋へ行く」「手をつないだり肩を抱いて歩く」「デートの帰りに軽いキスをする」が3割。「ホテルに行く」「夏休みなどに2人で旅行する」のは1割と低い。性別では、性体験の存在を予測できる「ホテルに行ったり、夏休み2人で旅行する」項目で男子が積極的である。

(p. 71 表5-3、p. 72 図5-3)

## 11. 性情報との接触

① 男子で「アダルトビデオ」を見たことがある者は63.2%、3年の男子では71.2%に達する。女子では「テレクラに電話したこと」が「何度もある」7.2%、「1、2回」を含めテレクラへの電話体験のある者は29.6%である。学年別にみると、テレクラへの体験は1年生26.1%と最も高く、「何度もある」割合は10.4%にも達する。(p. 74 表5-5、p. 75 表5-6)

## 12. 親子関係

① 父親と「とてもよく話す」割合は16.7%、「わりと」を合わせると5割、母親と「とてもよく話す」38.1%、「わりと」を合わせると8割を超える。性別では、女子が母親と話す割合が9割で、男子との差が顕著である。(p. 76～77 表5-7・8)

② 父母への反発をみると、父親に「とても反発を感じる」が20.2%、母親へは14.8%、「わりと反発を感じる」を合わせても、父親・母親に反発を感じる者は4割程度である。

(p.77表5-9)

③ 父母に抱くイメージは、父親、母親とも「仕事熱心」が最も高い。性別では女子の方が母親に対し「仕事熱心で思いやりがあり、頼りになり、やさしい」とプラスの評価が高い。(p.79表5-11、p.80表5-12)

④ 両親とよく話す群と話さない群を比較すると、父親へのイメージは「仕事熱心で、やさしく頼りになる」と両群に差がみられないが、母親へは、よく話す群では「頼りになり思いやりがある」に対し、話さない群では、「仕事熱心」のイメージを持っている。反発を感じる群と反発を感じない群では、反発を感じない群に父母に対するプラスの評価が高い。(p.81表5-13、p.82表5-14)

### 13. ストレスと自己像

① 「なんとなくイライラしたり、何もする気になれなかったり、体がだるい」と感じている者は6割、学年別では、3年生に「すぐカッとなる」と感じる者が多い。成績別では下位者にストレスが高い傾向がみられる。また、部活動を熱心にやっている者は、運動部・文化部にかかわらず数値が低い。(p.83表5-15・16、p.84表5-17、p.85表5-19)

② 自己像では、「友だちが多くて、明るい性格」に「とても・わりとそう」と答えた者が6割。成績上位者は自分を高く評価し、自分に自信を持っている。(p.85表5-20、p.86表5-22)

### 〔調査概要〕

対象●福岡・山梨の高校1～3年生1,989名  
(男子990名、女子999名)

時期●1996年7月

方法●学校通しによる質問紙調査

サンプル数 (人)

	1年	2年	3年	合計
男子	298	389	303	990
女子	316	377	306	999
合計	614	766	609	1,989

### 〔執筆分担〕

尾澤 弘恒(桜美林高等学校教諭)……………第1章  
 仁平 正男(東芝海外子女教育相談室)……………第2章  
 木下 勉(東京都立上野高等学校教諭)……………第3章  
 蒲生真紗雄(東京都立上野高等学校教諭)……………第4章  
 三枝 恵子(埼玉県立松山高等学校教諭)……………第5章

## 第 1 章

# 高校生の日常生活

高校生になると、その活動範囲は中学生と違って、時間的にも地域的にもものすごく広がり、しばしば親や教師の目の届かないところまでいってしまう。そんな生徒の日常生活は、家庭でも学校でもつかみきれないくらい目まぐるしく変化している。そこで彼らの生活が具体的にどのような様子であり、また、彼らがどんなことを考えているのか現状を調べてみた。もとより、限られた範囲での調査で、今の高校生全体にあてはめて断定的な結論は出せないが、それでも多くの現象は現代の高校生を反映していると考えてよかろう。

高校の増設などで進学率は上昇し、一部の進学校を除いては全体に入学しやすくなり、街には高校生があふれ、街中を我が物顔でかっ歩しているのは高校生といえるほどである。この生徒たちが、現在の高校生の風潮を形成していることは間違いない。そして、今また大学への進学が容易になりつつあり、このような流れが若者の主たる風潮となっていくのだろう。それは過去の高校生たちが経験してきたものとは異なる広がりを持っていて、どんなに追いかけてもつかみきれない多様性と奥深さを持っている。

## 1. 生徒たちのプロフィール

この調査には、表 1-1 に示した 1,989 名の高校生の協力が得られた。学年、男女比率はおおむね平均化しており、それぞれの表す傾向は現代の高校生の大体の標準と捉えられる。しかし、調査対象の高校が地方都市なので、首都圏とは異なる地域性がでていると思われる。

表 1-2 は部活動の実態である。全体の 86.1% は、現在または過去に何らかの部活動の経験を持ち、現在でも運動部・文化部を合

わせて 43.7% が熱心に活動している。学年別にみると、運動部所属が学年進行で半分までに落ち込み、退部者が増えているのは明らかに進学が絡んでいると考えてよかろう。また、中には、レギュラーになれそうもないと自分の将来性に見切りをつけて退部した者もいるだろう。性別では、熱心に活動しているのは、運動部では男子が女子を 12.3% 上回り（男子 37.6%、女子 25.3%）、文化部では、男子の 8.0% に対して女子は 16.8% と倍以上の差が



ある。男子はどちらかというと身体を動かす 動的な面へ関心を向けている。  
 動的な方に興味関心が強く、女子は静的で知

表1-1 サンプル数

(人)				
	1 年	2 年	3 年	合 計
男 子	298	389	303	990
女 子	316	377	306	999
合 計	614	766	609	1,989

表1-2 部活動 × 性・学年——男子は運動部、女子は文化部

		運動部		文化部		以前入って いた	入ったこと がない	その他
		熱心	不熱心	熱心	不熱心			
全 体		31.3	10.5	12.4	9.4	22.5	11.3	2.6
性 別	男 子	37.6	10.4	8.0	6.1	24.8	10.8	2.3
	女 子	25.3	10.6	16.8	12.7	20.1	11.7	2.8
学 年	1 年	39.9	15.1	11.6	9.3	12.3	9.7	2.1
	2 年	33.3	10.4	15.7	9.8	16.5	12.5	1.8
	3 年	20.5	6.0	9.0	9.0	40.2	11.3	4.0

表1-3で成績からみると、上位者に不参加者が多いのが目につくが、「二兎を追うものは一兎をも得ず」との認識からであろうか。進路別では、受験準備に忙しい難関4年制大学以上を目指す者と、専修・専門学校進学者、就職者に部活動不参加が目立っている。

高校に入って、楽しみなことの1つに新しい部活動への参加がある。中学にはなかった新しい部活動への参加で、厳しいがやさしい兄や姉の上級生に囲まれて過ごす日々はどん

なに楽しいものだろう。そういう新入生の気持ちもわかる気がする。

部活動への参加回数では、ハードな運動部は精力的に連日練習をし、文化部は気ままにのんびりと楽しむものという先入観があるが、表1-4によれば、どの部も熱心に活動している様子がうかがえる。特に、「熱心に活動している」運動部で、1週間休みなしに活動しているのが大多数（7回56.0%、6回31.9%、合計87.9%）というのには驚く。1週間

表1-3 部活動 × 成績・進路

		成 績					進 路						
		上の方	中の上	中	中の下	下の方	制超 大難 学関 4年 制	大難 学関 4年 制	制普 大通 学 4年 制	4や 年さ 制し 大い 学	短 大	学専 校修 ・ 専門	他就 職・ その 他
運動部	熱心	32.9	30.5	27.8	33.6	35.3	30.2	29.8	36.1	31.8	24.5	27.5	28.6
	不熱心	9.9	11.3	11.2	10.0	9.6	10.6	8.6	10.1	12.7	16.8	12.5	7.9
文化部	熱心	13.2	10.5	14.6	13.7	9.3	12.8	13.6	12.1	9.1	15.1	11.0	11.9
	不熱心	8.8	10.5	9.9	9.8	7.2	7.8	10.3	10.1	5.5	13.4	6.0	9.5
以前入っていた		15.4	22.1	21.5	20.7	27.4	23.4	21.8	17.9	29.1	17.9	32.5	26.2
入ったことがない その他		19.8	15.1	15.0	12.2	11.2	15.2	15.9	13.7	11.8	12.3	10.5	15.9

○は最大値

表1-4 部活動への参加回数（週）× 学年・性・部活動——運動部への熱心な参加者の  
猛烈さがきわ立っている

(%)

	全 体	学 年			性 別		部 活 動			
		1 年	2 年	3 年	男 子	女 子	運 動 部		文 化 部	
							熱 心	不 熱 心	熱 心	不 熱 心
週7回	42.5	38.2	47.7	39.7	42.2	42.8	56.0	26.0	48.1	7.5
週6回	24.7	28.6	22.1	23.5	31.1	18.4	31.9	22.0	17.0	6.0
合 計	67.2	66.8	69.8	63.2	73.3	61.2	87.9	48.0	65.1	13.5

○は最大値

ずっと休みなしで活動し身体を休める時間もないのは、成長期の生徒たちにとってどんな結果を生むか、いささか心配でもある。性別で、週のうち6回から7回活動しているのが男子で73.3%、女子でも61.2%に及んでいる。

次に、表1-5は成績についての自己評価を示した。成績を「上の方」と自己評価する者は1割未満であり、41.1%が「中の下」「下の方」と評価しており、「中」の34.9%を上回っていて、非常に自分に対する評価が厳

しく謙遜している生徒が多い。特に、男子では4人に1人が「下の方」と評価しており、女子の14.6%との差が顕著である。

表1-6は、卒業後の進路希望である。超難関4年制大学を志望する者から、就職希望まで幅広く分布している。性別では、超難関4年制大学や難関4年制大学に、男女の差がほとんどみられない。

表1-5 成績 × 性——男子に下位と自己評価する者が多い

		(%)				
		上の方	中の上	中	中の下	下の方
全体		4.7	19.3	34.9	21.4	19.7
性別	男子	6.1	18.0	31.3	19.8	24.8
	女子	3.3	20.6	38.6	22.9	14.6

表1-6 卒業後の進路 × 性——進学意欲が高い

		(%)							
		超難関 4年制 大学	難関 4年制 大学	普通の 4年制 大学	やさしい 4年制 大学	短大	専修・ 専門学校	就職	その他
全体		11.3	25.0	31.7	5.7	9.3	10.4	2.6	4.0
性別	男子	12.3	27.6	35.7	8.2	0.5	8.1	3.0	4.6
	女子	10.3	22.4	27.8	3.1	18.1	12.6	2.2	3.5

表1-7は、将来像の予測を進学、家庭生活、社会的達成について尋ねた。「一流大学に入学できる」ことが「たぶん・きっと可能」な割合は1割にも達しておらず、「とても・かなり無理」と考えている者が7割、「社会的に大活躍できる」ことが「たぶん・きっと可能」とする者は2割と、社会的な達成期待は低い。一方、家庭生活では、「普通くらいの暮らしができる」と思っている者は8割、「幸せな家庭が作れる」7割と、家庭

生活での達成期待はかなり高い。『モノグラフ・高校生』vol.46「文系・理系と高校生」のデータと比較しても、ほぼ同様の結果であった。

性別では表1-8によれば、「一流大学に入学できる」や「社会的に大活躍できる」項目で男子の方が若干高い傾向がみられるが、「好きな相手と結婚できる」「普通くらいの暮らしができる」「幸せな家庭が作れる」「望んでいる仕事につける」で女子の数値が高く、「家庭も仕事も」の意志が強くみられる。

表1-7 将来の見通し——社会的な達成期待は低い

(%)

	とても無理だろう	かなり無理だろう	やや無理だろう	たぶん可能だろう	きっと可能だろう
1. いわゆる一流大学に入学できる	47.8	24.1	19.6	4.5	4.0
2. 好きな相手と結婚できる	16.9	15.7	25.5	25.0	16.9
3. 幸せな家庭が作れる	9.1	7.2	18.1	40.2	25.4
4. 普通くらいの暮らしができる	5.3	3.5	8.9	50.6	31.7
5. 望んでいる仕事につける	8.5	8.4	31.6	34.9	16.6
6. 社会的に大活躍できる	25.3	19.9	30.7	12.9	11.2

表1-8 将来の見通し × 性——女子は家庭も仕事も

(%)

	男子		女子
1. いわゆる一流大学に入学できる	11.9	>	5.1
2. 好きな相手と結婚できる	36.5	<	47.2
3. 幸せな家庭が作れる	58.9	<	72.3
4. 普通くらいの暮らしができる	75.6	<	88.9
5. 望んでいる仕事につける	47.5	<	55.5
6. 社会的に大活躍できる	26.6	>	21.5

「たぶん」+「きっと」可能だろうの割合

## 2. 日常生活

### (1) 基本的な生活習慣

高校生の生活がどうなっているか、まず、1日の始まりである起床時間からみたのが表1-9である。6時前に起きているのは18.6%で、全体の半数以上(53.2%)が6時から7時までの間に起きる。学年が進むにつれ起きるのが遅くなり、「7時すぎに起きる」1年25.4%、2年25.6%、3年34.1%、男子の方(「7時すぎ」34.9%)が女子(「7時すぎ」21.5%)より起きるのが遅い。

10年前に調査したもの(『モノグラフ・高校生』vol.18「高校生の生活時間」調査対象1・2年生)と比較してみると、当時は「6時前に起きる」が14.5%、「7時すぎ」が27.3%で、今回の方が若干早い。1年生は入

学直後の緊張で「遅刻をしない」という気分が強いのに、3年生くらいになると、「遅刻してもいいや」との安易な気持ちが強くなっていく傾向があり、どこの高校でも見られる一般的な現象である。学校によっては3年生は選択の時間が増え、登校時間がかかり自由なところもあるし、3年生の多くが大学を目指し、夜遅くまで勉強に励んでいるせいかもしれない。

しかし、朝早く起きて無遅刻無欠席で通そうという決心の強い生徒たちはどこの学年にもいることと思う。さらに、バスや電車などの交通機関が少ないため、それに間に合うようにするためには早く起きなければならないという地域性も考えられる。

表1-9 起床時間 × 学年・性——早起きは低学年・女子

	全体	学年			性別	
		1年	2年	3年	男子	女子
6時前	18.6	(21.1)	17.3	17.9	15.8	< 21.3
6時～7時	53.2	53.5	(57.1)	48.0	49.3	< 57.2
7時～8時	28.2	25.4	< 25.6	< (34.1)	34.9	> 21.5

○は最大値

就寝時間はどうか。表1-10によれば、朝早く起きるための十分な睡眠を考えると、遅くとも11時には就寝の必要があるが、7割強の生徒が11時から午前1時の間に床に就いている。午前0時以降をとってみると1年生が43.7%であるのに対し、2・3年生はそれぞれ10%ほど多くなっている。また、男子は女子の47.0%より約8%多い55.3%が0時以降に就寝している。現代の高校生には夜更かし型が多いことがわかる。これで

は、授業中に居眠りをしたり、ぼんやり授業を受けるのも当たり前といえよう。

寝るのが遅くなる原因は、テレビ・ラジオの深夜番組、マンガといった娯楽が大部分であろう。そのような誘惑的なものが氾濫している世界に生きる高校生は、一面では被害者であり、やむを得ないのだろうか。概して、下級生の方が、そして女子の方が早寝早起きで、より健康的な生活を送っているといえる。

表1-10 就寝時間 × 学年・性・部活動・進路 —— 疲れる運動部員は早く就寝

(%)

	全 体	学 年			性 別		部活動			進 路			
		1 年	2 年	3 年	男 子	女 子	運 動 部 で 熱 心	文 化 部 で 熱 心	た 以 前 入 っ て い	学 難 関 4 年 制 大	制 や さ し い 4 年	短 大	就 職
11時前	11.5	14.7	9.1	11.4	11.5	11.5	12.3	10.2 = 10.2		10.2	16.6	11.8	19.6
11時～12時	37.4	41.6	36.5	34.1	33.2	41.5	38.3	36.9	33.4	36.0	36.6	41.9	27.6
0時～1時	34.9	31.8	37.1	35.3	36.2	33.6	34.8	37.1	34.5	36.7	31.2	34.6	29.2
1時すぎ	16.2	11.9	17.3	19.2	19.1	13.4	14.6	15.8	21.9	17.1	15.6	11.7	23.6

○は最大値

次に起床時の空腹感をみてみよう。表1-11によれば、普通に夕食を食べ、特別な夜食などをとらずに寝たのであれば、朝起きたときには「少しすいている」か「あまりすいていない」のいずれかになるのが当然だと思うが（合計64.1%）、「ぜんぜんすいていない」は全体で8.6%で、多いのは1年生（12.1%）、部活動不参加者（11.0%）。運動部で熱心に活動している者は、よく食べてよく寝ているのだろう。どこの学校でも見られる情景であ

るが、校門前の店やコンビニでは部活動を終えた生徒がたむろして、夕食前の空腹を満たしている姿を多く見かける。

起床時間との関係では、空腹のために寝られず早起きしてしまうのだろうか。早朝起床する者に「とても・わりとすいている」が多い。それに対して、「ぜんぜんすいていない」は7時すぎに起きる者が際だって多い。遅くまで起きていて、夜食やおやつで朝になっても空腹にならず、寝坊している姿が想像される。

表1-11 起床時の空腹感 × 学年・性・部活動・起床時間——お腹がすくのは、3年生、運動部員・早朝起床者（%）

	全体	学年			性別		部活動			起床時間		
		1年	2年	3年	男子	女子	運動部で熱心	文化部で熱心	入ったことがない	6時前	6時～7時	7時～8時
とても・わりとすいている	27.3	23.6 < 27.5 < (30.7)	27.0 < (27.5)	(32.3) > 31.4 > 25.5	(36.2) > 27.3 > 22.8							
少しすいている	30.5	30.0 (32.1)	29.0	29.9 < (31.0)	30.6 31.0 (31.1)	28.6 (30.5)	30.2					
あまりすいていない	33.6	(34.3)	33.9 32.5	33.2 < (34.1)	31.3 29.0 (32.4)	29.0 < 34.4 < (35.4)						
ぜんぜんすいていない	8.6	(12.1)	6.5 7.8	(9.9) > 7.4	5.8 8.6 (11.0)	6.2 < 7.8 < (11.6)						

○は最大値

## (2) 食事

休み時間にお弁当を食べている生徒に尋ねると、朝食をとらないで登校した生徒が結構多い。今回の調査でも「毎日食べて」登校している生徒は79.6%しかいない。男子は75.8%で、女子の83.4%を約8%下回っている。そして、「ほとんど食べない」生徒は1年で6.7%、2年で5.8%。しかし、前出の『モノグラフ・高校生』vol.18では、「毎日食べている」割合は75.6%で、きちんと食べて登校

している生徒は、今回の方が多いことがわかる。朝食抜きは男子9.7%に対して、女子はわずかに4.5%である(表1-12)。この数字に驚く人も大勢いるのではないだろうか。朝食抜きで授業を受けている生徒がこのように多数であると、昼食前の授業が「腹が減っては戦はできない」というような気の抜けたものになるのはよくわかる。

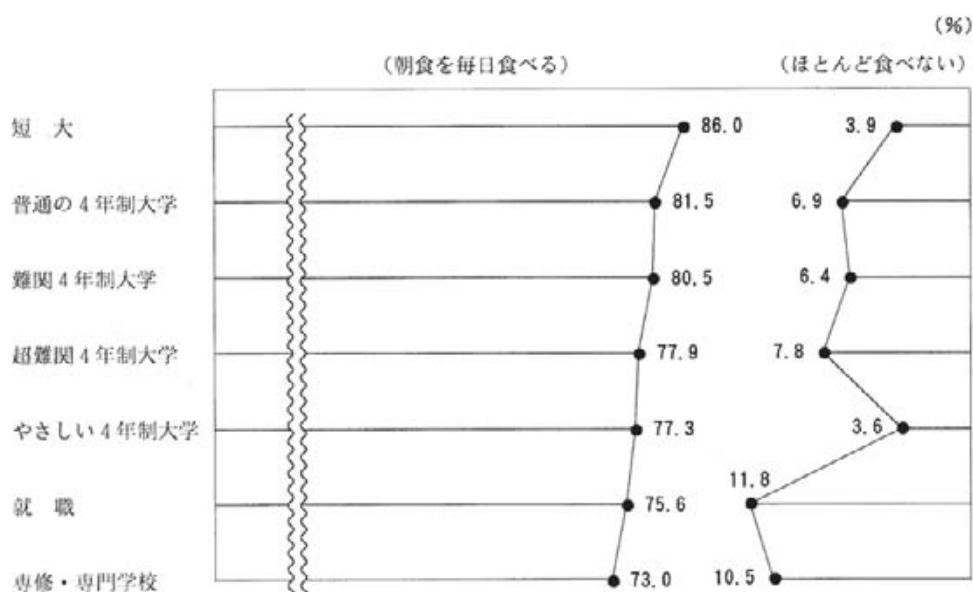
進路別でみると、図1-1のように、「短大」志望者が圧倒的に「きちんと食べて」登校する。どちらかというところ、「専修・専門学

表1-12 朝食を食べるか × 学年・性・部活動——毎朝食べるのは女子が多い

	全体	学年			性別		部活動		
		1年	2年	3年	男子	女子	運動部	文化部	以前入っていた
毎日食べる	79.6	78.9	80.9	78.6	75.8	83.4	79.4	82.4	76.5
週の何日かは食べる	13.3	14.4	13.3	12.2	14.5	12.1	14.6	11.8	13.1
ほとんど食べない	7.1	6.7	5.8	9.2	9.7	4.5	6.0	5.8	10.4

○は最大値

図1-1 朝食を食べるか × 進路——大学進学希望者が食べている





校、就職」希望者に朝食を抜く傾向がある。

表1-13で起床時間との関係を見ると、7時半以降の起床者で「毎日食べる」のは60.5%。23.8%は「ほとんど食べない」で登校している。寝坊をして朝食を食べるゆとりがないのだろうが、朝食を食べるより寝ていた方がよいという者も結構いるようだ。

次に、昼食の様子を示したのが表1-14である。朝食を毎日食べて出かける彼ら(79.6%)が、どうしてかお弁当を「毎日持っていく」者は59.5%に減ってしまう。お弁当を作ってくれる母親の大変さを思いやってくることであろうし、母親が準備できなかったせい

もあろうが、お弁当を持っていかなくても学校やコンビニで容易に昼食を手に入れられる現代の姿であろう。昼食時は友人とのコミュニケーションの大事な一時であり、お弁当を持っていかなかったためにその輪に入れないこともあるようだ。お弁当を広げ、お互いのお弁当の中身を見せ合い、時にはおかずのやりとりをしたりして、本当に楽しく過ごしているほほえましい情景を目にする。

14.9%の生徒が「持っていったことがない」か「ほとんど持っていかない」ようだが、学年別では2年生の18.3%、3年生の18.2%に対し、1年生は7.7%と「持っていか

表1-13 起床時間 × 朝食を食べる——早起きは、しっかり食べる

(%)

	毎日食べる	週に5日くらい食べる	週に1~3日くらい食べる	ほとんど食べない
6時前	83.5	4.3	6.8	5.4
6時~6時30分	82.1	5.7	7.0	5.2
6時30分~7時	78.4	9.6	7.3	4.7
7時~7時30分	82.8	7.0	4.0	6.2
7時30分~8時	60.5	5.9	9.8	23.8

○は最大値    ~~~は最小値

表1-14 お弁当持参 × 学年・性・成績——3年生、男子の方がお弁当を持っていかない

(%)

	全体	学年			性別		成績				
		1年	2年	3年	男子	女子	上の方	中の上	中	中の下	下の方
毎日持っていく	59.5	64.5	59.4	53.9	54.3	64.5	69.7	60.9	62.5	56.1	53.7
何日かは持っていく	25.6	27.8	22.3	27.9	23.5	27.7	21.3	27.1	24.0	28.1	25.7
ほとんど持っていかない・持っていったことがない	14.9	7.7	18.3	18.2	22.2	7.8	9.0	12.0	13.5	15.8	20.6

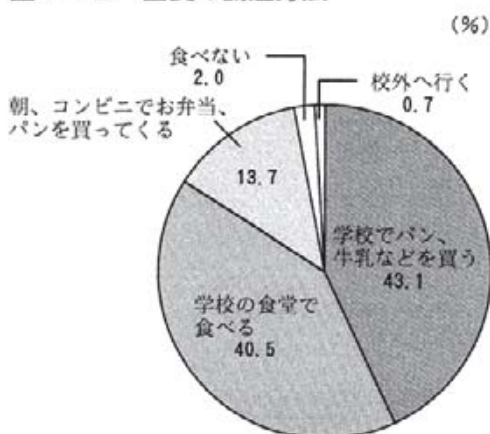
○は最大値

い」生徒が少ない。女子が7.8%で男子の22.2%と比べ、断然「持っていかない」生徒が少ないのは、自分でお弁当を用意する子が多いからであろう。

興味深いのは成績との関係で、中位以上の生徒が「毎日持っていく」割合が平均以上なのに、「中の下」「下の方」と成績が下がるにしたがって、毎日お弁当を持っていく生徒の割合が減ることである。これはどんな理由によるのであろうか。

では、お弁当を持っていかない生徒は昼食をどうしているのだろうか。図1-2は、全生徒の3分の1強にあたる37.7%のお弁当を持っていかない生徒が答えてくれたものであ

図1-2 昼食の調達方法



るが、その80%以上が校内の食堂で食べているか、校内でパンや牛乳などを買ってすませている。最近はこちらこちらに早朝から開いている便利なお弁当屋やコンビニがあり、登校前に買ってくる手回しのよい生徒も増えている。ただ2.0%の生徒が「食べない」ということはダイエットのためなのであろうか。学校を抜け出して、校外の食堂に足をのばす生徒はごくわずかだ。地方都市というところは何をしてもすぐ目立つので、生徒たちにも自らブレーキがかかるのだろうか。

さて、家に帰ってからの夕食はどうだろうか。朝のあわただしさと違って、ゆっくり1日の出来事を話しながら夕食をとるのが普通であった以前とは異なり、遠距離通勤や残業、フレックスタイム勤務などが増えて、家族全員で夜の食卓を囲むという状況が少なくなっているのがわかる。「家族全員で食べる」は4割にも満たない。地方都市であれば、通勤にさほど時間のかからない勤務先が多いであろうし、父親を含んだ家族の夕食がもっと増えてもよいと思うが、父親不在の食卓がなんと多いことだろう。また、1人で寂しく食事をする孤食の多さにも驚く。運動部で熱心に活動している者に1人の食事が多いのは、家族みんなが食事をすませた後に遅く帰宅することが原因だろう(表1-15)。

表1-15 夕食は誰と一緒に × 学年・性・部活動——「家族全員」が意外に少ない

	全体	学年			性別		部活動				入ったことがない
		1年	2年	3年	男子	女子	運動部		文化部		
							熱心	不熱心	熱心	不熱心	
1人で食べる	23.0	24.2	22.9	21.9	25.7	20.3	34.5	21.8	20.1	15.1	16.2
きょうだいと食べる	3.5	4.2	3.3	3.2	2.9	4.1	3.7	4.4	3.3	2.2	3.3
父親以外の家族と食べる	27.0	27.8	26.2	27.2	25.3	28.7	22.5	30.1	27.5	30.3	28.3
家族全員で食べる	38.3	36.3	39.9	38.1	38.0	38.5	30.5	40.3	42.5	45.9	44.1
その他	8.2	7.5	7.7	9.6	8.1	8.4	8.8	3.4	6.6	6.5	8.1

○は最大値

### 3. 平日の行動

平日の放課後に高校生はどんなことをしているのだろうか。表1-16によれば、「テレビやビデオを毎日見る」が8割を超し、「1日おきくらい」まで入れると、9割以上の生徒がテレビを見ている。明らかに今日の家庭生活にテレビがしっかり根をおろしていることがわかる。「ぜんぜん見ない」は1.5%である。一方、「ほぼ毎日、家で勉強する」が34.5%とおよそ3分の1にすぎないのは、地方といえ、進学校ということを考慮すると、いささか低い数字のようだ。「1日おきくら

い」を加えても62.2%にすぎないのは、どうしたことだろうか。教師にすれば、時間の長さはともあれ、毎日継続的に学習に励んでほしいところである。

パチンコやディスコが、ともに「ぜんぜんしない」が9割を超えているのは、近隣の目が光っている地方ならではのことであろう。

これで浮かぶのは、何事もほどほどに楽しみ、高校生にふさわしくないことは慎み、家庭ではテレビをよく見るが、勉強は時間のあるときにちょっと必要に応じてするという生

表1-16 平日の行動

	(%)						
	ほぼ毎日 している	1日おき くらい	5日に 1回くらい	10日に 1回くらい	1か月に 2回くらい	1か月に 1回くらい	ぜんぜん しない
1. テレビやビデオを見る	80.3	11.5	4.2	1.7	0.4	0.4	1.5
2. 家で勉強する	34.5	27.7	14.6	6.2	3.5	2.7	10.8
3. コンビニやレンタル ショップに行く	9.0	14.4	24.4	19.5	11.3	9.3	12.1
4. 友だちに電話をする	6.9	15.1	25.5	16.4	9.8	8.5	17.8
5. 下校途中、街をブラ ブラする	3.7	4.2	8.6	10.3	11.3	16.1	45.8
6. ショッピングに行く	0.9	1.3	6.7	15.3	26.3	30.3	19.2
7. カラオケをする	0.9	0.4	0.6	2.9	13.3	39.8	42.1
8. 喫茶店やファースト フードの店に行く	0.9	1.3	5.4	9.0	18.5	22.5	42.4
9. 塾や予備校に行く	0.9	6.6	13.3	1.6	0.3	0.3	77.0
10. おけいごとに行く	0.9	1.3	9.6	3.2	0.7	0.7	83.6
11. 異性とデートをする	2.8	1.4	2.5	1.8	2.4	5.0	84.1
12. パチンコに行く	1.0	0.3	0.4	0.4	0.8	2.1	95.0
13. ディスコに行く	1.1	0.1	0.0	0.2	0.3	0.5	97.8

徒像であろう。

それぞれの行動を、もう少し詳しくみてみよう。

### ① テレビやビデオを見る

前述したように、圧倒的に多くの生徒がテレビやビデオを視聴しており、その大多数はテレビであろう。これは一般家庭のテレビ普及率からいっても当然で、自室に専用のテレビを所有している者も相当いる。ビデオにしてもレンタル店が増え、録画再生の機器も容易に手に入るようになって、友だちと交換したりして、見る機会は以前と比べ格段に増えている。全体の96.0%が週に1回以上見ており、「ぜんぜん見ない」という生徒はごくわずかにすぎない。「ほぼ毎日見る」が少ないのは、帰宅の遅い「部活動を熱心に行っている」生徒、「難関4年制大学を目指す」生徒である(表1-17)。

る」生徒、「難関4年制大学を目指す」生徒である(表1-17)。

### ② 家で勉強する

「ほぼ毎日」家庭学習するのは3年生で、学年が進むにつれ増加している。しかし、「ぜんぜんしない」生徒には学年差がみられない。部活動からみると、やはり疲れるのか、「運動部」所属者は「ほぼ毎日する」者が3割に満たないし、「ぜんぜんしない」者が1割を超えている。成績の「中の上以上」の生徒や「超難関・難関4年制大学を志望する」者は「毎日する」が4割以上いる。大きな目標が学習の原動力になっていることは想像に難くないが、「超難関4年制大学を目指す」者の12.4%が「ぜんぜんしない」と答えている。「勉強は学校でするもの、それで十分」と考える余裕を持っているのだったら幸せである(図1-3)。

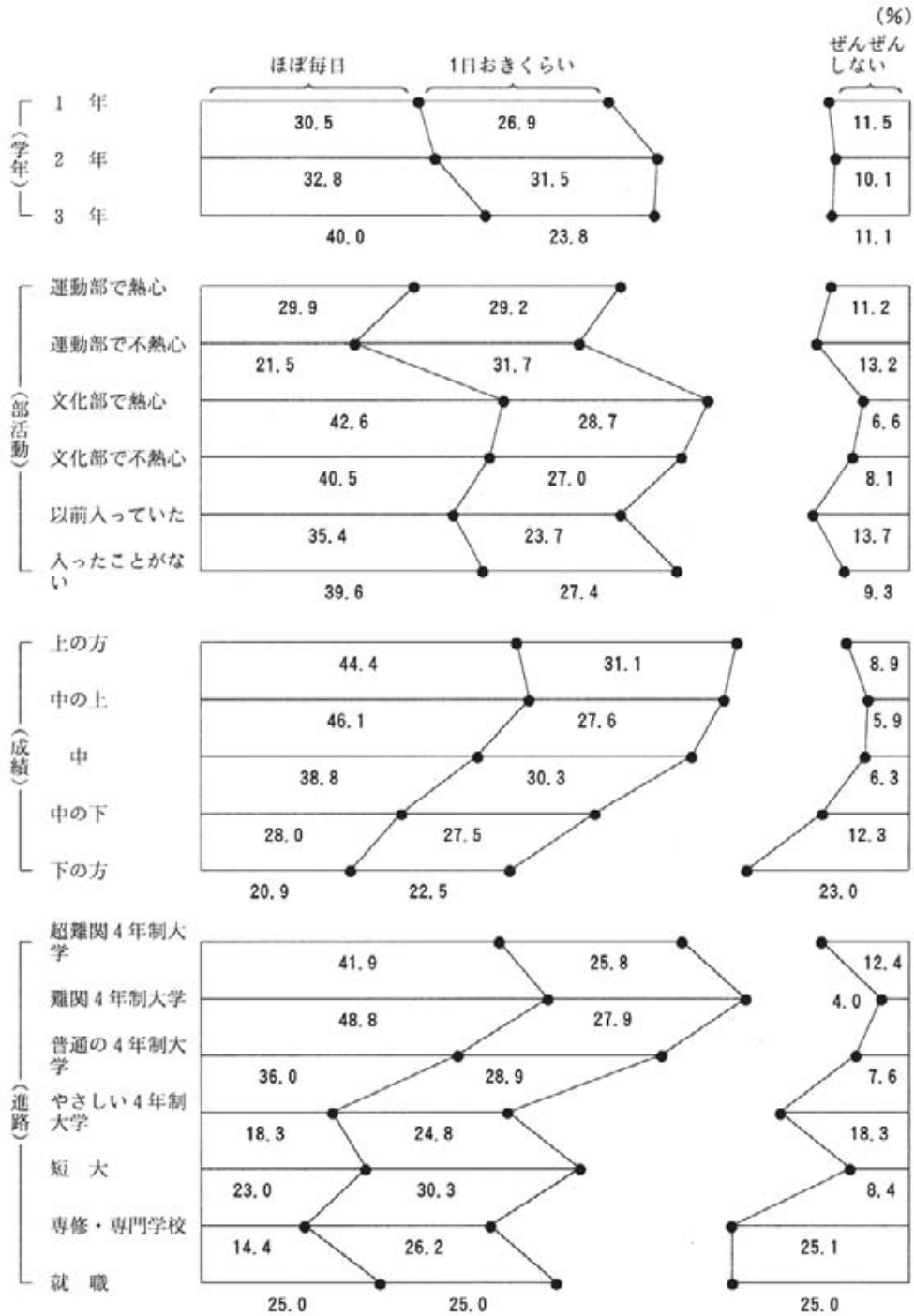
表1-17 テレビやビデオを見る × 部活動・進路

(%)

	全 体	部活動						進路			
		運動部		文化部		いた 以前入 って	が 入 った こ と	大 学 難 関 4 年 制	制 大 学 普 通 の 4 年	短 大	他 就 職 ・ そ の
		熱 心	不 熱 心	熱 心	不 熱 心						
ほぼ毎日見ている	80.3	78.0	83.0	73.4	84.4	82.3	84.2	77.9	82.3	83.8	79.7
週に1回以上見ている	15.7	17.8	15.5	22.2	13.4	13.6	10.3	19.4	14.1	14.5	16.4
月に2、3回見ている	2.1	1.9	0.5	3.6	1.2	2.0	2.6	1.0	2.3	1.1	2.3
月に1回くらい見ている	0.4	0.4	0.0	0.0	0.5	0.7	0.7	0.4	0.5	0.0	0.0
ぜんぜん見ない	1.5	1.9	1.0	0.8	0.5	1.4	2.2	1.3	0.8	0.6	1.6

週に1回以上見ている = 「1日おきくらい」 + 「5日に1回くらい」  
 月に2、3回見ている = 「10日に1回くらい」 + 「1か月に2回くらい」  
 (以下、表1-24まで同じ)

図1-3 家で勉強する × 属性



③ コンビニやレンタルショップに行く

昨今、コンビニやビデオ・CDのレンタルショップは、たいていの街にあり、都会ではいたる所にあるといっても過言ではない。そして、それら夜遅くまで営業している店の中には、若者の姿が多く見られる。週に1回以上コンビニに行く生徒は47.8%にのぼり、学年・男女差は少ない(表1-18)。

④ 友だちに電話をする

ポケベルは今や高校生に必携の流行の小物となっており、都市部では携帯電話を持つ者も増えてきているといわれる。そうでなくても大部分の家庭に電話が普及している時代に

子どもたちが電話を利用することは日常茶飯事であり、電話をぜんぜんかけないということの方が稀であろう。6.9%が「ほとんど毎日」のように電話をかけ、40.6%が「毎週」かけている。このように電話をかけ合う理由を生徒に聞いたところ、「なんとなく」「寂しくなったとき」「誰かと話したくなったとき」「宿題や予定の確認をしたいとき」「面と向かって話せないとき」などが主なものであった。学校で話せばすむようなことをわざわざ電話で話すのは、他人が入らない「2人だけの密室」という機密性を好む年頃の行動であろう。女子の「ぜんぜんかけない」者は10%以下で、女子の電話利用の頻度の高いの

表1-18 コンビニやレンタルショップに行く × 学年・性

	(%)					
	全 体	学 年			性 別	
		1 年	2 年	3 年	男 子	女 子
ほぼ毎日行く	9.0	11.5	8.0	7.8	12.6	> 5.4
週に1回以上行く	38.8	35.9 <	39.5 <	40.8	42.5	> 35.1
月に2、3回行く	30.8	30.2	32.8	28.8	26.2	< 35.3
月に1回くらい行く	9.3	9.5	8.7	9.9	7.0	< 11.6
ぜんぜん行かない	12.1	12.9	11.0	12.7	11.7	< 12.6

表1-19 友だちに電話をする × 性

	(%)		
	全 体	男 子	女 子
ほぼ毎日する	6.9	6.7	< 7.1
週に1回以上する	40.6	32.3	< 49.0
月に2、3回する	26.2	25.5	< 26.8
月に1回くらいする	8.5	9.7	> 7.3
ぜんぜんしない	17.8	25.8	> 9.8

がはっきりしている。親が子どもの長電話に辟易し、通話料の多さに悩んでいるのは女生徒の家庭であることがうかがえる（表1-19）。

⑤ 下校途中、街をブラブラする

学校の所在地が繁華街をひかえている所か、歩いているとどこの高校の生徒かすぐわかるような所かということは相当影響する。都会では多数の学校が接近し、生徒たちも街へ出ると自分は何校生とあまり意識しないようであるが、地方では近隣の目が光っていることが多い。そのせいか、全体の半分近くの45.8%が街中をブラブラすることはないと答えて

いる。遅くまで部活動を熱心に行っている生徒はブラブラしている時間などないだろうし、男子は、半分以上がそのような習慣がない。（表1-20）。

⑥ ショッピングに行く

ショッピングに「ぜんぜん行かない」と答えた女子は、男子の半分(13.1%)である。頻繁に行かないにしても、「1か月に2、3回」行くことが多いようである。ファッション性のあるもの、カラフルなもの、かわいい小物など、女子はショッピングの話になれば、浮き浮きした気分になるという（表1-21）。

表1-20 下校途中、街をブラブラする × 学年・性・部活動

	全体	学年			性別		部活動					
		1年	2年	3年	男子	女子	運動部		文化部		以前入って	が入ったこと
							熱心	不熱心	熱心	不熱心		
ほぼ毎日する	3.7	3.3	4.4	3.3	6.0	1.5	3.6	3.4	2.0	4.8	4.8	3.3
週に1回以上する	12.8	14.3	12.9	11.3	12.5	13.2	9.9	13.1	6.1	12.3	19.5	14.5
月に2、3回する	21.6	18.8	24.9	20.1	17.3	25.8	18.0	24.8	25.0	18.3	22.9	24.1
月に1回くらいする	16.1	15.7	17.3	15.1	12.5	19.7	14.9	19.4	13.9	22.0	14.1	17.8
ぜんぜんしない	45.8	47.9	40.5	50.2	51.7	39.8	53.6	39.3	53.0	42.6	38.7	40.3

○は最大値 ◊は最小値

表1-21 ショッピングに行く × 性

	全体	男子	女子
ほぼ毎日行く	0.9	1.3	0.4
週に1回以上行く	8.0	7.1	8.9
月に2、3回行く	41.6	36.0	46.9
月に1回くらい行く	30.3	30.3	30.7
ぜんぜん行かない	19.2	25.3	13.1

○は最大値

⑦ カラオケをする

高校生の外での遊びは、禁断のパチンコを除けば、カラオケかゲームセンターで遊ぶくらいであろう。ゲームがどちらかといえば孤独型であるのに対して、みんなでワイワイとやるカラオケは集団型として人気があるようだ。しかし、密室であるということで、飲酒喫煙の場にもなり得るので手放しで放置しておけない。経営者なり従業員が良識を持っていてくれることが望まれる。男子の50%近くが未経験なのに、女子の未経験者が約35%なのは、女子の方が友だちと賑やかに過ごすのが性に合っているのだろう（表1-22）。

⑧ 喫茶店やファーストフード店に行く

喫茶店に立ち寄ることがそれだけで不良行為であり、高校生にあるまじき行動として厳しく規制されていたのはもはや昔語りになってしまった。しかし、喫茶店は今でも、どちらかという喫煙などの不良行為をしやすい場所のようである。一方、ファーストフードの店は割合オープンな構造になっているせいか、不良行為の場所にはなりにくいようだ。したがって、ファーストフードの店の方が出入りの頻度が高いのではないと思われる。また、全体の42.4%がそのような場所に出入りしないと答えている（表1-23）。

表1-22 カラオケをする × 性・部活動

	全 体	性 別		部活動					
		男 子	女 子	運 動 部		文 化 部		以 前 入 っ て い た	入 ら な い こ と
				熱 心	不 熱 心	熱 心	不 熱 心		
ほぼ毎日する	0.9	1.4	0.3	0.8	1.9	0.8	0.5	0.5	0.7
週に1回以上する	1.0	1.1	0.8	0.6	1.0	0.4	0.5	1.8	1.1
月に2、3回する	16.2	15.3	< 17.0	15.8	< 22.4	8.7	9.7	19.8	17.2
月に1回くらいする	39.8	32.5	< 47.3	40.7	39.3	38.4	< 49.0	38.3	36.7
ぜんぜんしない	42.1	49.7	> 34.6	42.1	> 35.4	51.7	> 40.3	39.6	44.3

○は最大値

表1-23 喫茶店やファーストフードの店へ行く × 性

	全 体	男 子	女 子
ほぼ毎日行く	0.9	1.3	0.5
週に1回以上行く	6.7	6.6	6.8
月に2、3回行く	27.5	23.1	< 31.8
月に1回くらい行く	22.5	19.7	< 25.2
ぜんぜん行かない	42.4	49.3	> 35.7



⑨ 塾や予備校に行く

全体の77.0%が塾や予備校通いを「ぜんぜんしていない」。週に1回以上行くが20.8%で、中学時代の延長のように塾などで指導を受けているのだろう。「ぜんぜん行かない」生徒の傾向をみると、成績が「下の方」になるにしたがって増加している。(表1-24)。

⑩ おけいごとに行く

高校生のおけいごととして挙げられているのは、ピアノ、習字くらいで、大体週1回通うのが相場ようだ。週1回以上通う女子は16.3%で、男子の7.1%をはるかに上回り、逆に行かない割合は、男子の90.2%に対し女子は77.4%。おけいごとに通うのは圧倒的に女子の方が多い。

⑪ 異性とデートをする

学年では上級生になるにつれデートする割

合が明らかに増えている。頻度では男女差の出ているところもあるが、「ぜんぜんしない」割合がほぼ同じになっている。

⑫ パチンコ・ディスコに行く

高校生は未成年であり当然パチンコ店の入場は禁止されているし、地方ではすぐ目立つので入る者はほとんどいない。表1-16によれば、1%ほどがどうしてか、おとなの目をかすめて毎日遊んでいるようだが、思ったより健全な生徒たちである。ディスコには97.8%がぜんぜん行っていない。

この調査で高校生の生活を見て気がつくことは、日常生徒たちを見ていて感じることはほぼ同様である。調査対象が地方の進学校ということもあり、いたって真面目に学校生活を送っている様子が見えがえる。

表1-24 塾や予備校に行く × 学年・成績

	(%)									
	全 体	学 年			成 績					
		1 年	2 年	3 年	上の方	中の上	中	中の下	下の方	
ほぼ毎日行く	0.9	0.5	0.9	1.3	4.4	0.5	1.0	1.0	0.3	
週に1回以上行く	19.9	21.6 >	20.7 >	17.2	24.2 >	24.1 >	21.5 >	17.4 >	15.1	
月に2、3回行く	1.9	2.3	1.6	2.0	2.2	1.4	1.8	2.2	2.4	
月に1回くらい行く	0.3	0.3	0.4	0.2	0.0	0.5	0.1	0.7	0.0	
ぜんぜん行かない	77.0	75.3 <	76.4 <	79.3	69.2 <	73.5 <	75.6 <	78.7 <	82.2	

○は最大値

## 第2章

# 学校生活・授業

高校生の生活時間の大部分は学校生活が占めている。とくに全日制普通科高校生についての生活パターンは、端的に言えば、学校の授業では半分以上を英数国の3教科を中心に学習し、1・2年生は放課後になれば部活動にかかわり（時にアルバイトをしたり、時に予備校、塾に行き）、3年生になると大学受験に備えての生活が中心となるというのが、数十年来の大方の姿であったろうか。しかし一方で、公立と私立（特に中・高一貫の学校）、首都圏と地方、男子と女子の高校生の間にも前々から違いはみられたが、21世紀も間もない現在、「生徒減」「少子化」「学校週5日制の実施」「予備校・塾等からの情報の普

及」「女子の大学進学率上昇」等々の状況も加わり、高校生の学校生活や授業も変わってきたのではないだろうか。

さらにまた、普通科の中に特色ある「コース」や「類型」を設置する学校が増え、専門学科（農・工・商・水産など）の中にも、例えば、理数科、英語科、芸術科、体育科、国際教養科、自然環境科等々が登場してきた。そして、平成6年度からは「総合学科」が新登場した。3本立ての学校制度の中で、高校生の学校生活や授業への意識・感覚はどう変わってきたのか、または変わっていないのか…という観点から、以下6項目についての調査をまとめた。

### 1. 遅刻・忘れ物

遅刻、忘れ物共々、本人の自覚、家族の協力、指導が大前提であるが、学校生活の場合、ふつう深刻な事態に至らないだけに軽く考えがちである。

① 遅刻については、朝のショートホームルームを設けて、担任が出欠をとってから授業に入る学校（ないしは学年）と、朝からいきなり授業に入る学校（学年）とで違ってくる。

前者の場合、担任が直接本人や家庭に注意・連絡できるからである。3年生の場合、多くの学校が朝から選択中心の時間割を組んでいるので、かつてのような3年生だけがダントツに多いという形は少なくなっている（表2-1・学年の項）。

② 遅刻防止策に力をつくす学校も多く、遅刻3回を、欠課（欠時）1回分にす学校、

皆勤賞（3年間無遅刻・無早退・無欠席）を卒業式に出して、効果を上げている学校は公・私立を問わず、数が多い。

③ 生徒が遅刻の口実によく使う「授業に魅力がない、おもしろくない」「教科書通りの授業」という面も、たしかに遅刻する大きな要素ではあるが、表2-1の性・進路・成績が示しているように、男子が女子に比べ圧倒的に多く、一番遅刻する層は成績下位層というのはどの学校でも変わらない構図である。

④ 学校・家庭間の距離があっても、自転車を使う通学者も多い。都立高校でも、自転車通学者が9割近い学校がある。概して、こ

の生徒たちの遅刻は少ない。

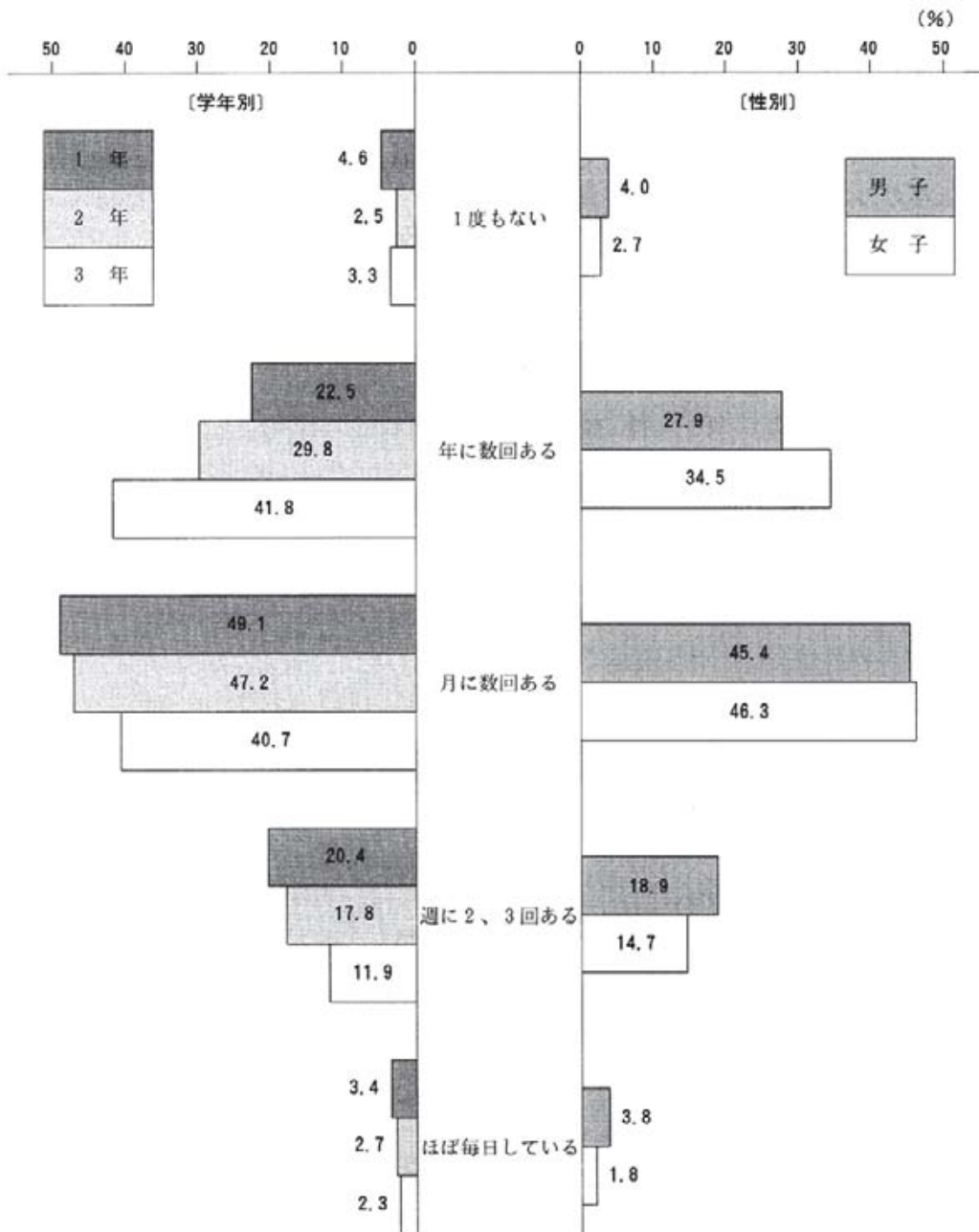
⑤ 図2-1「忘れ物」が、月・週・日毎になるにつれ、下級生に多くなっていくのは宿題やレポートなど、下級生ほど多いのがふつうだからであろう。3年生は、一般に選択科目が多くなる代わり、総授業数は減るからである。さらに学校生活にも慣れ、要領を身につけ、各自のロッカーに授業関係の用具を置きっ放しにしていく。保護者会の通知類も家に持ち帰らず、自分で捺印して提出する、といったことはよくあるケースで、表面的には忘れ物は少なくなるわけである。

表2-1 遅刻 × 学年・性・進路・成績——3年生が多いとは言えない

(96)

		1度もない 年に数回ある	月に数回ある	週に2、3回ある ほぼ毎日している
全 体		88.8	8.4	2.8
学 年	1 年	93.9	4.7	1.4
	2 年	85.9	10.9	3.2
	3 年	87.6	8.9	3.5
性 別	男 子	84.2	11.0	4.8
	女 子	93.7	5.7	0.6
進 路	就 職	80.0	16.0	4.0
	専修・専門学校	86.9	10.1	3.0
	短 大	93.9	5.0	1.1
	やさしい4年制大学	88.1	7.3	4.6
	普通の4年制大学	91.0	7.2	1.8
	難関4年制大学	89.6	8.1	2.3
	超難関4年制大学	86.2	10.1	3.7
成 績	上の方	92.3	5.5	2.2
	中の上	94.3	4.6	1.1
	中	91.5	7.0	1.5
	中の下	86.9	10.0	3.1
	下の方	81.0	13.2	5.8

図2-1 忘れ物 × 性・学年——1年生に多い



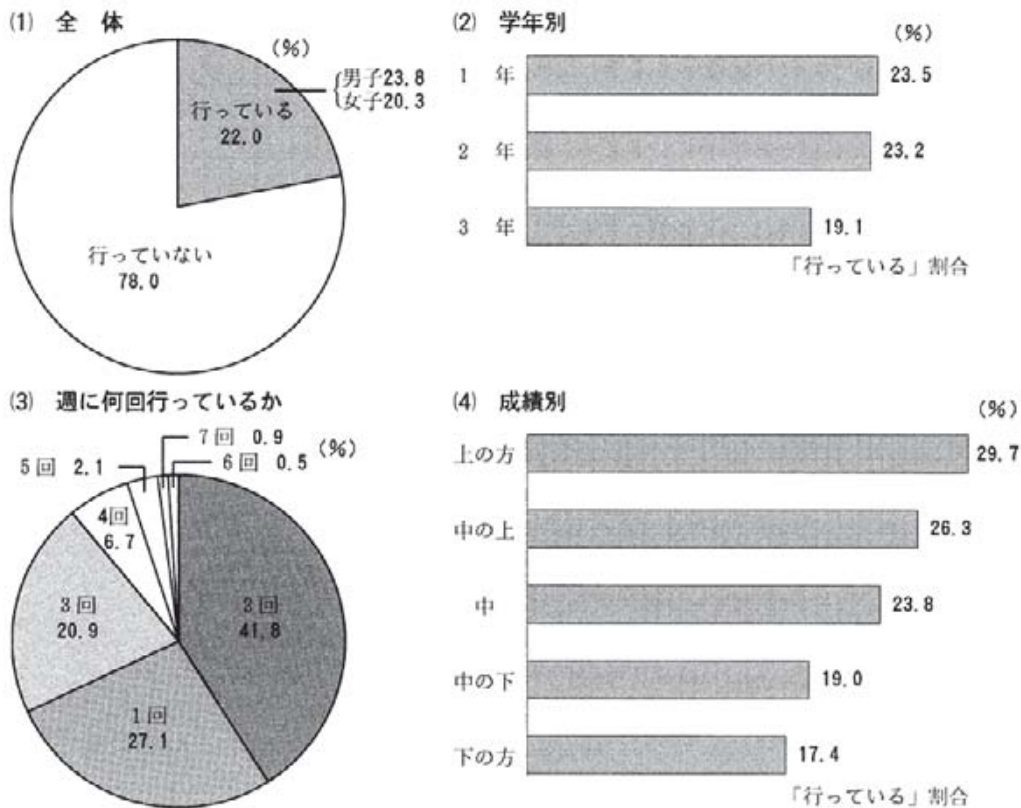
## 2. 塾・予備校通い

現在、日本全国、生徒の集まる地域にはどこでも、塾・予備校はあり、浪人だけでなく、現役生、1年生も多く通っているのも珍しくなくなっている。高校の学校行事や放課後の部活動まで避けて通り、予備校通いをする生徒が少なくないというのが現状である。

今回の調査校4校が、首都圏の高校ではないにしても、予備校等に通える環境にはあると考えてデータを見た。図2-2(1)(2)(3)が示すように、予備校・塾に通っているのは、全体の5分の1強で、「週1~3回」が大多数を占める。意外だったのは3年生の

塾・予備校通いが1・2年生より少ないことだった。推測だが、学校側が放課後、時には始業前に、特に3年生に補習を実施していることが地方では多く、そのケースではないかと考えている。また図2-2(4)のように、成績の上位から下位になるにしたがい、予備校通いも減っていくのは、下位者は学校の勉強だけで精一杯という、ゆとり的な大きな要因であろうか。しかし逆に、成績が上位なら予備校に行く必要はない、むしろ下位者が行って弱点を補うべきではという考え方もあろう。

図2-2 塾・予備校通い—約2割



### 3. 初めから入学したかった高校か———

高校入試は、全国的に年を追って生徒数が減少している現在、年々容易になっているわけだが、公・私立、大都市圏・地方等を問わず、伝統校、有名校といわれてきた高校の志願者、競争率は毎年ほとんど変わっていない。

本調査校4校は、公立普通科男女共学校で首都圏外とまではわかってはいても、その実態—入試や地域の状況、ましてや4校の競争率や大学進学率などのデータはない。そうした条件の中で、図2-3(1)全体、(2)性別をみると、「初めからぜひ入学したかった」から「まったく入学したくなかった」高校の5段階が、上29%台から下12%台へとただらかに分布しているのは、よく中堅校以上で行われるこの種のアンケート結果とほぼ一致している典型的な分布といえよう。

ただ(3)学年、(4)成績となると、2つの特色がみられる。1つは、入学願望の率が1・3年生はほぼ同じ率なのに、2年生は際立って高いこと、したがって「まったく入学したくなかった率」も1・3年生よりも低い

ことである。単純に考えれば、2年生の入学年度は他学年に比べ第一志望の入学者が大部分で、第一志望校が別にあり、いわゆる「すべり止め」として4校に入学した者が例年より少なかったといえようか。さらに(ここから先はまったくの想定だが、生徒減少期の昨今よくあるケース)、1年生・3年生は入学試験の合格発表後、入学手続き者が定員を割ってしまい、第二次募集をして不足分を補って入ってきた生徒がいる学年なのではないかとも考えられる。

もう一つの特色は、(4)成績での分布である。「上の方」から「下の方」まで、「初めからぜひ・やや入学したかった高校」とした者が、それぞれ7割から5割近くいることだ。大都市圏の高校でよく聞く話では、「上の方」の生徒や「下の方」の生徒の中には、入学してからしばらくの間、「こんな学校に来たくなかったんだ」という者が多いそうだが、本調査校4校の場合、「上の方」にはあてはまらないようである。

図2-3 初めから入学したかった高校か——「初めからぜひ・やや」が5割

(1) 全体 (%)

1	初めからぜひ入学したかった高校	29.6
2	初めからやや入学したかった高校	24.6
3	どちらともいえない	21.3
4	初めはあまり入学したくなかった高校	11.9
5	初めはまったく入学したくなかった高校	12.6

(2) 性別 (%)

1	男子	29.2
	女子	30.1
2	男子	23.1
	女子	26.0
3	男子	23.7
	女子	18.8
4	男子	11.2
	女子	12.6
5	男子	12.8
	女子	12.5

(3) 学年別 (%)

1	1年	23.6
	2年	38.4
	3年	24.7
2	1年	23.4
	2年	28.7
	3年	20.5
3	1年	19.3
	2年	20.7
	3年	24.0
4	1年	14.4
	2年	8.0
	3年	14.2
5	1年	19.3
	2年	4.2
	3年	16.6

(4) 成績別 (%)

上の方	A	69.2
	B	14.3
	C	16.5
中の上	A	58.4
	B	18.0
	C	23.6
中	A	55.1
	B	22.3
	C	22.6
中の下	A	53.0
	B	22.2
	C	24.8
下の方	A	48.3
	B	23.0
	C	28.7

初めからぜひ    初めからやや    どちらともいえない    初めはあまり    初めはまったく  
 ●                    ●                    ●                    ●                    ●  
 └─── A ───┬─── B ───┬─── C ───┘

## 4. 授業の理解度

もし、数学の先生が教えているクラス40人の生徒に、「君たちはふだんの私の授業をどのくらい理解していると思うか。次の5つから選べ」と聞いてみて、「ほとんどわからない」という返答が7人くらいいたとしたら、さぞやショックなことだろう（図2-4参照）。生徒としては「わからないことが多い」くらいの気持ちで選んだ答えだと解したい。

図2-4を以下のように3つにまとめてみると、3教科に対する性差が鮮明になってくる。

	大体わかる	半分くらいわかる	わからない
国語 男子	33.4%	38.9%	27.7%
国語 女子	46.2	38.2	15.6
数学 男子	36.1	27.8	36.1
数学 女子	24.5	33.1	42.4

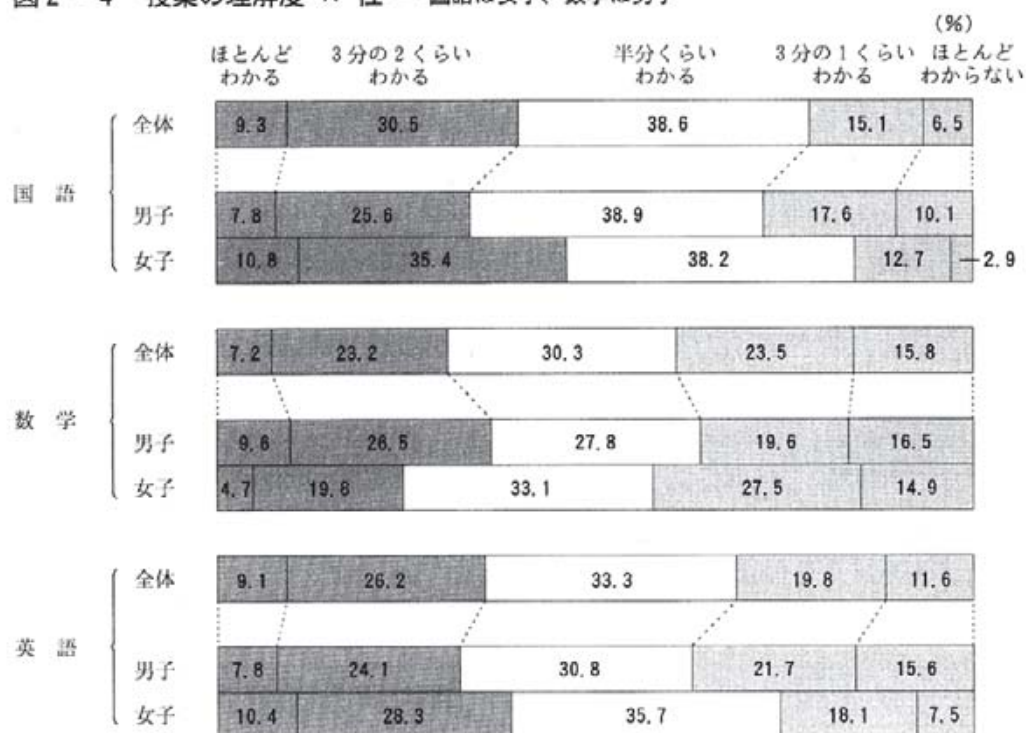
英語 男子	31.9	30.8	37.3
英語 女子	38.7	35.7	25.6

（大体わかる＝「ほとんど」＋「3分の2くらいわかる」）

（わからない＝「3分の1くらいわかる」＋「ほとんどわからない」）

大ざっぱに言わせてもらえば、国語は女子に得意な者が多く、不得意な者が少ない。数学は男子に得意な者が多く、女子に不得意な者が多い。英語は得意な者はやや女子が多く、不得意な者は男子に多い。このパターンは新制高校が発足して以来ほとんど変わっていない傾向だが、新教育課程となり、女子生徒の大学進学率も男子と同じようにならなってきた昨今、今後も似たような形をたどるのだろうか。

図2-4 授業の理解度 × 性——国語は女子、数学は男子





## 5. 登校時の気分

会社員であれ、教職員であれ、高校生であれ、毎朝定時に職場や学校に向かう気分は、習慣化されているとはいえ、その日その日で異なるものである。高校生の場合、社会人に比べ使命感、義務感、責任感などは薄いとはいえ、青春まっただ中の生活で、様々な苦楽を抱えて登校してくる。学校生活の不調を切り抜けるだけの要領や知恵も身につけてくる年齢層であり、適当にサボる生徒もいれば、無遅刻・無早退・無欠席を目指す生徒も多い。ただ、最近の高校生、特に3年生（学校によっては2年生も）の場合、選択科目が多く入り、登校時間も各人まちまちになっている学校が多い。受験という重圧感はあるものの、

1・2年生とは気分的に違ってくるのだろうか。

そうした登校時の気分について、図2-5に示した。性別では「とても・かなり・やや楽しい」（楽しい派）が、男子でちょうど50.0%、女子が66.1%。学年別では「楽しい派」が2年生>1年生>3年生を示している。2年生は高校生活の要領も身につけ、その中心となって苦労も多いが楽しみも多い生活である。3年生で「楽しい派」が少ないのはやはり進路問題、ことに受験準備が終始ついて離れないためだろうか。成績別では「下の方」が「あまり・ぜんぜん楽しくない」（54.2%）割合が高い。

図2-5 登校時の気分 × 性・学年・成績——やはり3年生は楽しさに乗れず

	登校時の気分 (%)			
	とても楽しい	かなり楽しい	やや楽しい	あまり楽しくない ぜんぜん楽しくない
(1) 性別				
男子	6.7	8.6	34.7	30.9
女子	10.5	13.6	42.0	25.9
(2) 学年別				
1年	11.4	12.4	37.2	25.8
2年	8.6	12.2	41.5	27.1
3年	5.8	8.6	35.4	32.7
(3) 成績別				
上の方	8.9	15.4	36.2	20.9
中の上	10.5	11.3	43.0	25.5
中	7.7	14.1	39.1	28.9
中の下	9.5	10.2	39.1	28.6
下の方	8.4	6.6	30.8	31.8

## 6. 学校生活の充実感

アンケート結果を見る前に、次のような普通科全日制高校生の平均的な特色を考えてみた。

〔1年生〕まだ高校生活数か月で、中学生気分からは抜け切れていない。特に授業、部活動で緊張気味な毎日に疲労感もあるが、充足感がある。友だちや先生方に対しては、まだぎこちなさがある。女子は概して、男子より高校生活にとけ込むのが早い。

A B C、因数分解、堀 辰雄、細胞分裂  
やっと昼めし（朝日歌壇より）

〔2年生〕勉強面では新しい教科、科目に慣れてきた反面、手を抜く科目も出てくる。3年生からバトンタッチされた部活動、生徒会活動、学校行事関係の中心となり、友人・異性関係、趣味、アルバイト、予備校・塾通い等々との時間調整に苦勞する。順調にいつているときは充足感はあるが…。

クラブやめよと叱る父母シンバルをたたき  
終われば星もない空（毎日歌壇より）

〔3年生〕希望進路も決め、勉強も本格的に始めた（始めようとしている）が、なかなか軌道にのれない。志望大学も有名校を目指してはいるが、浪人もひそかに覚悟している。

諸々の事情から進路変更の者も一部出てくる。友人関係、異性との交際もある程度冷えていく。

肩を触るる近きに座れど きみはただ受験  
のこのみ吾に問いけり（朝日歌壇より）

さて、表2-2を全体的にみて、最大値の大部分は「どちらともいえない」であり、次いで「あまり・ぜんぜん充実していない」が続く。性別では女子>男子、学年別では1年>2年>3年。部活動では「文化部、運動部で熱心」が充実感が高く、充実感の低い「以前入っていた、入ったことがない、その他」と対照的である。

成績面や卒業後の進路面では、「とても・かなり充実している」面だけから比較してみると、ほぼ納得できる数値だが、「やさしい4年制大学」を目指す者が19.1%という最小値を示しているのは、短大志望者の充実感も合わせて考えると、次のような層と想定している。

- ・学校の成績はあまりよくない
- ・受験勉強はあまりしたくない
- ・だが大学だけは出ておきたい
- ・できれば浪人もしたくない

これは平均的高校生の伝統的進路姿勢を示すものといえようか。

表2-2 学校生活の充実感 × 属性——勉強と部活動の両立がポイント

(%)

		とても・かなり 充実している	どちらとも いえない	あまり・ぜんぜん 充実していない
全体		26.8	40.3	32.9
性別	男子	22.6	39.4	38.0
	女子	31.0	41.2	27.8
学年	1年	30.1	40.3	29.6
	2年	28.5	41.0	30.5
	3年	21.2	39.5	39.3
部活動	運動部で熱心	36.7	40.7	22.6
	運動部で不熱心	18.4	42.5	39.1
	文化部で熱心	43.0	36.1	20.9
	文化部で不熱心	17.2	45.2	37.6
	以前入っていた	16.5	39.9	43.6
	入ったことがない	18.9	39.2	41.9
	その他	26.0	32.0	42.0
成績	上の方	29.7	37.3	33.0
	中の上	35.1	35.1	29.8
	中	27.8	42.4	29.8
	中の下	25.2	43.3	31.5
	下の方	18.8	37.6	43.6
進路	超難関4年制大学	34.4	27.5	38.1
	難関4年制大学	30.3	41.5	28.2
	普通の4年制大学	25.9	43.1	31.0
	やさしい4年制大学	19.1	35.5	45.4
	短大	27.4	44.1	28.5
	専修・専門学校	20.5	42.5	37.0
	就職	20.0	30.0	50.0
	その他	23.4	36.4	40.2

○は最大値